



アカシア俳句会



令和四年 春季俳句会 「句評」 兼題：梅(含・子季語) 春の季語の句

一、「特選句」 選定句評

○癒えし身に満ちくる五感上り鮎

西村敏治

◆回復されたのですね！ 体の「やる気」が、アユに例えてうまく表しておられます。

◆早い川の流れに逆らって力強く泳ぐ若鮎の姿に、自らを鼓舞する様子がよく分かります。

都 福仁

○大鳥居くぐり三輪山風光る

加龍恵子

◆雄大な風景とよいリズム、季語の適切な美しさ。「梅白し」もいつも洋服を縫ってくれた母を思い魅かれましたが。

山家由紀

○伸びすればみ空にひとつ奴風

戸堂博之

◆ほのぼのとした春を感じさせられる句だと思えます。

吉澤志保子

◆晴天下で伸びをして見つけた風、良かったですね。作者は少年時代を思い出したことでしょう。焦点の定まった一句。

佐藤多恵子

◆思わず青空に向かって伸びをしたくなる身体性と風の距離感が絶妙。

元永悦子

○香が誘う雅の世界夜の梅

戸堂博之

◆私の心に響きました。

岩崎悦子

○出棺に蕾を零す枝垂梅

中野亘子

◆人は棺にいづれ入る時を迎えるわけです。ドラマティックな胸苦しい情景に心震わせられました。

西村敏治

○淡黄梅透き通るまで枝に在り

中野亘子

◆早春には美しく香り立った黄梅が、色あせても枝にとどまっている様子は八十歳半の我が心に響く句です。

三木徳彦

○母のこと一日おもう白椿

富岡訓子

◆私も歳をとって、若い頃より母の事を想う日が増えました。生家にあった椿の木と共に情景が重なりました。

吉田以登

○ヨチヨチと母の指持ちのどかな陽

都 福仁

◆身に浮かぶ母子の姿がほほえましく、明るい春らしいところをよく表現され、私のころもほっこりします。

佐藤茂弘

○枯れ残る老いた小枝に梅の花

都 福仁

◆枯れ残る老いた小枝：正に私：に梅の花：そうか！生ある限り頑張らねば：と気付かさ
れ鼓舞され、深謝。特選に。
網 佑子

○老（おい）ふたり夕餉はなやぐ雛の寿司

山家由紀

◆遠い昔のお子達とのなやぎを思い起こされ、今もお二人には心はなやぐ特別なお寿司で
しょう。
加龍恵子

◆幼年の子供達のいた頃の雛の寿司を懐かしく、よし今晚ふたりで食べようよ、というわく
わくした情景が素晴らしいです。
岩壺克哉

◆普段は健康を考えて煮物中心の茶色がちな食卓が、雛祭りの今日は色とりどりのちらし寿
司・・・気分も華やぐ一句です。
野本展子

○白梅やあまたの新枝天を突く

吉田以登

◆白梅の清楚にして勢い溢れる生命力に見た感動を詠った秀句。「ものに託して心を詠う」、
学びがありました。
前田秀一

○宿の湯にばかりばかりと春蜜柑

吉田以登

◆春ののんびりした情景がよく出ていて、ばかりばかりのオノマトペがよく効いています。
戸堂博之

○心研ぎ高き強きへ立志春

網 佑子

◆卒業式に臨む若人の決意が「心研ぎ」に強く表現されていると感じました。六十七年前の
私たちを思い出しました。
中野亘子

二、気付きのひとこと

佐藤多恵子（元「京鹿子」俳句会同人）

○草餅の香に蘇るふるさとよ（選句番号33）

◆結句が、「よ」となっていますが、ここではふるさとに呼びかける必要はないので、「ふるさ
と」とし「蘇る」を結句にした方がよい。

「よ」は詠嘆の意を表しますが、作者が詠嘆するよりも読み手に感動させる方がよい。
◇草餅の香にふるさと蘇る

☆土生俳句論：「俳句は心や情を直接的に詠ってはならない」（編集人註釈）

○木漏れ日よ掬ひとるような余生かな（選句番号49）

◆選句番号33の句と同様の理由により「木漏れ日よ」ではなく、「木漏れ日を」とした方がよ
い。「木漏れ日』を』掬いとる」という表現は素晴らしいですね！比喩が効いています。

◇木漏れ日を掬ひとるような余生かな

○母のこと一日おもう白椿（選句番号41）

○凍る風行き先迷う救急車（選句番号51）

○春雪の屋根より音たて解ける朝（選句番号60）

◆現代仮名遣いになっており、土生俳句論に習って歴史的仮名遣いに直した方がよい。

☆土生俳句論(小川誠二郎「金剛俳句会」第二回(平成二十五年九月十九日)コメントより引用)

「扉俳句(土生俳句論)では、古文、古語、文語、歴史的仮名遣いで詠むことにしています。それによって、芭蕉以来の俳句と連続性を保つことができずし、それに加えて、古文、文語が、長年の間に磨かれてきた日本語で、表現が的確にできるからです。

現代語は、明治になって、庶民の識字(しきじ)読み書きできること、できる人、その逆は文盲(もんもう)率を上げるために、「言文一致運動」で、話し言葉をそのまま書けば正式の日本語の文章言葉である、ということにして、東京弁を基礎にして、標準語として定めたものですので、歴史も浅く、変動も多く、あまり品格の高い言葉とはなっていないのが実情です。

短歌の世界では、現代語が多く混じっており、文語か現代語か、無原則にさえ見えます。」
(編集人註釈)

三、総括講評 私が選んだ句 中野陽典(元「扉俳句会」同人)

皆様個性のある、すばらしい句でした。
各自それぞれに好きな句を選んで鑑賞してください

選句番号	中野陽典「選句」作品 作者
61173 6260524644422822161598	<p>秀句</p> <p>白梅やあまたの新枝天を突く 吉田以登</p> <p>大鳥居くぐり三輪山風光る 加龍恵子</p> <p>草萌えを食むひつじ達日をあびて 佐藤茂弘</p> <p>梅白し母の形見のミシン踏む 加龍恵子</p> <p>伸びすればみ空にひとつ奴風 戸堂博之</p> <p>草の芽を食める羊の影短か 佐藤多恵子</p> <p>盆梅の百年の幹芸術だ 佐藤茂弘</p> <p>若草野羊の群れて大地食む 前田秀一</p> <p>空耳や母の声する彼岸かな 戸堂博之</p> <p>梅林や温かい色遠くから 佐藤茂弘</p> <p>春雪の屋根より音たて解ける朝 吉田以登</p> <p>肥後梅の蒼天を突く枝みどり 佐藤多恵子</p> <p>特選</p> <p>白梅や清らに生きよと云う如く 吉田以登</p> <p>宿の湯にばかりと春蜜柑 吉田以登</p> <p>部屋に陽の射し入る幸よ梅の花 山家由紀</p>

「編集後記」

春の海亡夫横顔車窓かな

富岡訓子

富岡訓子さんが、春季俳句会の投句作品の中で、私たちと同期の夫・富岡隆夫さんに思いを寄せながら三月十九日（土）、心不全のため急逝されました。お悔やみ申し上げます。今回は、四句をお寄せいただきましたが、今振り返りますと、いずれも今日の日あるを偲べれます。

春季俳句会への「投句」ご案内に添付した季節の写真の光景を詠んだ句が三句ありました。土生俳句論では、俳句では「何を詠うか」ではなく、「いかに詠うか」だと唱えられておりますが、奇しくも、今回は同じ光景を三者三様での詠い方を鑑賞することになりました。

図らずもこれら3句が、共に中野陽典さんに「秀句」として選句いただいたことは、句題写真提供者として光栄に思っております。

草の芽を食める羊の影短か

多恵子

草萌えを食むひつじ達日をあびて

茂弘

若草野羊の群れて大地食む

秀一

同じく、梅の樹の生命力を詠った句も五句見られ、「いかに詠うか」をじっくり味わうことが出来ました。

根圧の梢まで及び梅咲く

多恵子

梅が枝は再起動せりすんすんと

多恵子

肥後梅の蒼天を突く枝みどり

多恵子

枯れ残る老いた小枝に梅の花

福仁

白梅やあまたの新枝天を突く

以登

